

いつものように、お店に着いた。駐車場には、端っこにご主人の白いボルボがとまっているだけだった。となると、お客様はいないという予想が成り立つ。お店の入口に何やら貼り紙らしきものがある。「女性店主入院のためスイーツはお休みします。」とあった。残念。同時に女性店主のことが気にかかる。

お店に入る。案の定、ご主人が特等席で窓いでいた。しばらくの間、お客様が来なかつたのだろう。ご主人と入れ替わるように、我々が特等席に落ち着く。ここからは、眼前に広がる田園風景が一望できる。

稲穂が首を垂れる時期を逃してしまった。すでに稲刈りは終わっていた。それでも、目の前の景色には、心を落ち着かせてくれるだけの魅力がある。お店に着く前から、ご主人が淹れてくれる一杯の珈琲と奥様が用意してくれるケーキとを決めていた。頭も口もそうなっていた。

ところが、ケーキを注文することができない。こうなると、一杯の珈琲にすべてをかけることになる。いつも以上に、慎重に選んだ。だが、頼むものは、いつもと変わらない。それでも、いつも以上に味わいながら飲んだ。もう季節は晩秋を迎えていた。ちょっと寂しげな風景が広がる田園を眺めながら、深まりゆく秋を味わいつつ珈琲カップを口に運ぶ。これはこれでよい。

女性店主である奥様は、今の時期であれば、ケーキの傍らにどんなフルーツを添えてくれただろうか。いつも、その季節に合わせたフルーツが、美味しいケーキをさらに美味しくしてくれている。それは、桃だったり、梨だったり、葡萄だったりする。

我々が入店したことが呼び水となったのだろうか。次から次へと、お客様が入ってきた。あつという間に満席となつた。ご主人は、一組一組に丁寧に対応していく。我々以外にも、スイーツがないことを残念がっているお客様がいた。やっぱり、そうなのであろう。あのスイーツには、奥様のこころも添えられている。

元々ギャラリーをなさっていたご主人だけあって、店内にはセンスの光る展示物が置かれている。この前来たときは、飾られているものが変わっていた。夏のときは違つて、秋の時期に合わせたかのような色合いのものだった。そのさり気なさがいい。

次は、田園風景が真っ白に染まる雪の時期に来てみたい。白一色の世界である。昨シーズンは時機を逸した。青田風は、訪れる季節によって、見える景色も店内も変わっていく。それがこのお店の魅力となっている。加えて、ご主人と奥様の人柄である。この次は、ぜひとも奥様のスイーツを楽しみたい。添えられるのはイチゴだろうか。そんな気がする。